

「千葉氏

語る「だより

第三回総会開催される

平成二九年度総会は去る五月二〇日午後一時より千葉市中央区の「きぼー」大会議室で行われました。司会者から総会の定足数に達したことの報告があり、向後会長よりご挨拶があり、丸井副会長を議長に選出して議題に入る。

先ず第一号議案から第三号議案までを議題とし、山内幹事より第一号議案平成二八年度事業報告を資料に基づいて説明があり、続いて武山会計幹事より第二号議案平成二八年度収支決算書を資料に基づいて説明があり、更に山下監事より第三号議案、前第二号議案収支決算書についての監査報告「平成二九年四月一五日会計監査を行いました。その結果記帳簿及び諸帳票の記載整理も適切に処理されており正確なものと認められます。」という説明がありました。

平成29年度
第4号
発行・編集
千葉氏を語る会事務局
発行日
平成29年7月20日

議長より以上報告議案第一号議案より第三号議案について質問、ご意見等が御座いましたら挙手をして発言して下さい。議場から異議なしの声あり、そりでは此の三件の報告議案について承認に賛成の方は拍手でお願いします。議場拍手あり。報告議案三件は原案どうり承認されました。議長より次に、協議議案に入ります。議案第四号を議題とし、再び山内幹事より平成二九年度事業計画について資料により説明されました。次に議案第五号を議題とし、再度山内幹事より資料に基づいて説明がありました。議長より以上二件の議案を議題とし、質問、ご意見のある方は挙手をして発言して下さい。議場より異議なしの声あり、議長より異議ないものと認め全会一致で可決されたものと致します。

続いて「第六号議案役員の改選

について」を議題と致します。この案件は事務局長から説明して戴きます。日向事務局長より本年は当会の規約第一六条により全ての役員が任期二年の改選期であります。この度幹事でありました井井明光様と監事でありました山下護様が退任され、幹事でありました江波戸弘安様を監事とし、新しく伊井勉様、佐藤芳雄様が幹事に就任して戴くことについての議案であり添付資料のとおりであります。宜しくご審議願います。

議長より只今事務局長から説明のあったとおりであります。ご質問、ご意見等がありましたら挙手をして発言して下さい。議場から異議なしの声あり、それでは異議のないものと認め、原案どうり決定致しました。議長から之で本日の総会での審議事項は全て終了致しました。ご協力有り難う御座いました。以上で閉会と致します。

なお、引き続き記念講演会がありますのでご参加下さい。

記念講演

千葉氏が造像した仏像

宝聚寺住職 濱 名 順 徳

最初に扱いますのが山武郡横芝光町にある福秀寺にあります薬師如来立像であります。之は木造漆箔彫眼であり、高さ一六二センチで等身大の仏像であります。仏像の高さを計るときは髪の毛の生え際から計ります。材質は栢の木を採用し、一本造りであります。重量感のある仏像で背面は正面に比べると平坦に造られているようです。お薬師さんにしては優しさと云うよりは怖い感じがします。お顔の表情とか耳の大きさとかを見ると怖い感じの像である。平安前期の作成と思われる。とすると千葉氏に関係が無いと思われる。木彫の姿に漆を塗って金箔を貼る方法です。漆の層が厚いです。その上に乾湿を塗る。之は木心乾湿という技法であり、ここからも古いものであり平安前期の作であると言われている。此処に京都神護寺と奈良の元興寺の薬師如来立像（紙面の関係で絵を省略）がありますが、之は

九世紀の作であると言われている薬師如来は心身の病をいやす仏であるが、怨霊鎮めの役目もある。妙見と混合して天空を支配する薬師であり、目つきが鋭く癒やしては無く罪を懺悔すること世の中の汚れを祓って国家の安泰を願うと言うことを目的としている。その本尊として薬師如来が造られた時代である。人が懺悔しているかどうかを見とどける役目の仏像である。従って目の鋭い仏像になる。

そこで平成二五年修復工事を行った。この時は解体はせずに左手が欠けていたのを復元したり、塗装の修理等で解体はしなかった。胎内はフアイバースコープを挿入して撮影したところ、大変な胎内墨書（銘文）が現れた。

大勸進混合仏子智明

大旦那主平常秀平氏

大歳

承久元年戊寅八月八日

慶玄

ここでこの仏像の作成者は堺常秀であると判明した。之は大変大きな発見であった。それまでは平

安前期の作であると言われているのが承久元年（一一一九）即ち鎌倉時代であったことが判明したのです。そこでこの年はどういう年であったかというところ吾妻鏡の同年正月二七日の条は次のように伝えている。

為廿七日、甲午、晴、夜に入つて雪降る、積もること二尺餘、今日將軍家右大臣拝賀の、鶴岳八幡宮に御参、酉刻御出（中略）

若狭兵衛尉忠季
綱嶋兵衛尉俊久
東兵衛尉重胤
土屋兵衛尉宗長
堺兵衛尉常秀
狩野七郎光廣 右馬允ら託す
路地の随兵一千騎也

この日の随兵の中に平常秀が参加していたことが解る。

千葉常秀

銘文で大旦那と記されている平常秀は千葉常胤の孫で、上総千葉

氏の頭領堺平次常秀に比定される。常秀は成胤に次ぐ次男であったが、兄をしのぐ多くの所領を継承、官位も縦五位に除せられ、下

総守や上総介にも任じられるなど千葉一族一の実力者であり「源氏以外の御家人としては破格の扱いを受けていた。」とされる。本貫地は「上総国府所在地である市東・市西郡」とされるが、他にも一宮庄、埴生庄等上総氏の両総の遺領を多く受け継いでおり、九州の大隅郡の地頭であった記録もある。薬王院が所在する横芝光町は中世には匝瑳南条に属している。匝瑳郡が平常秀の所領であった確かな記録はないが、平安末には上総広常の兄弟に匝瑳常成がいて、上総氏系の所領で有った可能性が高い。従って、上総氏の遺領の多くを受け継いだ平常秀が広常誅殺の後にこの地を支配した蓋然性は極めて高いと言える。今回の銘文は地方史を考える上で誠に大きな発見であり、寺名の福秀寺の「秀」に由来する可能性がある。（中略）『源平闘諍録』は成胤を養子とする。成胤は父胤正と没年も近く（胤正一一〇三、成胤一一一八）、胤正の実子では常秀が長男であった可能性が指摘されている。「房総の薬師如来像とその信仰」

官位などは宗家を継いだ兄・成胤を超え、更に千葉介（下総介）の上官である下総守、ついで親王国である上総国衙の最高の地位である上総介の地位を獲得するに至った。更に『千葉大系図』には上総守護に補任されたと記されており、源頼朝に討たれた上総広常の子孫に代わって上総氏の地位を継承したとする見方もあるが明証はない。没年は不詳だが、嘉禎四年（一一三三）から仁治二年（一一四一）の間と推定されている。『ウィキペディアフリー百科辞典』

更に「源平闘諍録」には治承四年九月四日、右兵衛佐頼朝、白旗差して、五千余騎の兵を率して上総国より下総国へ発向す。爰に上総権介広常、右兵衛佐の御前に跪きて申しけるは、「君は此の程の軍に疲れさせたまひしうへ、兵共進み難くす。荒手の随兵を以つて広常先人を仕らんと欲す。広常には相ひ従ふべき輩には、白井の四郎成常・同じく五郎久常・相馬の九郎常清・天羽の庄司秀常・金田の小太郎康常・小権守常顯・匝瑳

(二頁からつづく)

の次郎助常・長南の太郎重常・印東の別当胤常・同じく四郎師常・伊北の庄司常仲・同じく次郎常明太夫太郎常信・同じく小太夫時常・佐是の四郎禪師等を始めと為て、一千余騎の兵を率して発向すべき」由を申す処に、千葉常胤申しけるは、「権介の所望謂われ無し。他国は知らず、下総国においては他人の綺有るまじ。常胤先陣を仕るべし」とて、相従う輩は、新介胤正・次男師常・同じく田部の四郎胤信・同じく国府の五郎胤通・同じく千葉の六郎胤頼・同じく孫堺の平次常秀・武石の次郎胤重・能光の禪師等を始めと為て、三百余騎の兵を引率して、下総国へ打ち向かひけり。

総国と上総国との境にある地点とする。③現在の芝山町東部と多古町の境界近くに堺という大字がある。この三点の中でも村田川河口の堺がその拠点であったのではないかと有力な説である。次に旭市野中の長禪寺に愛染明王座像(等身大)が安置されている。愛染明王とは愛欲のエネルギーを表現するものであり怒髪天を突くと言う形相である。之は怒った顔そのものであり、顔は真赤、後背には燃えさかる炎をつけている。手が六本ある。そのうち二本の手には弓と矢を持っている。之は本来愛の矢である。この矢で相手の心を射貫くという願いのこもった仏像である。ここはギリシャ神話と同じものである。平安時代は恋する相手の名前を書いて口の中に押し込める事をする。この時代は貴族の間ではどの女性も天皇に好かれ、その愛を受けるかがその家の繁栄につながったのである。ところが中世になると愛染明王が弓矢を持っているところから、武力の守護神として信仰される。元寇の乱には敵国の撃退を願っての信仰を強めた。此

の台座からはお宝が沢山でた。それで長禪寺の仏像は木造彩色彫眼で高さ百十一センチとある。ここにもかなり長文の胎内墨書があり(紙面の都合で全部は書けないのでその一部を紹介する。)先ず地主は千葉介殿胤富御代と三崎莊横根野中長善寺愛染本願長栄とあり、永禄十二年(一五六九)巳巳九月吉日。当寺長禪寺第九住長栄年満五十歳とある。

「永禄十年(一五六七)九月廿八日ヨリ番匠ヲ置十一月廿八日屋移辰年永禄十一年瀧別当ノ坊ヲ買取り堂ヲ造立□□印六月ヨリ番匠シ置九月十五日棟上大公太田清衛門殿堂供養トメ先師十三回来冬ナレドモ一座御訪遂十一月十八日其次ニ授者三十余人アルニ依傳法灌頂行畢且次ノ方十八人長日法□前代未聞之由皆人唱也此上ニハ本尊焼失之□迄也然処ニ京仏師小河淨慶トテカクレナキ名人被下也問及ビ術モ難成又自力ハ微塵程モ天レハ之思立ン力無之雖然願トベ天不満ケレハ万吉ハ本尊威力マカセテ被人ヲ永禄十二年三月十二日呼立即十三日細工ヲハシメ五月吉

日仏体之分畢作新仏体三貫文」と言う胎内墨書(銘文)が見つかったている。

続いて、この仏像を造製した十六世紀に京仏師淨慶の作と言われる仏像が県内に八点ある。このうち三点は現存していないが、五点は現存している。表一のとおりである。之は全て千葉氏関係の寺院に關係している。千葉氏は多く西国から仏師を呼び寄せて仏像を造らせた。之によつて千葉氏による県内の仏教文化の推進に大きな影響を与えたのです。その一つに永禄八年(一五六五)七月には千葉胤富は下総国東庄佐倉長徳寺(現在の佐倉市海隣寺)に木造阿弥陀三尊像を造らせている。(現存しない)

時間も少なくなりましたのでここで妙見についても少し話して見たい。北極星の神格化と言うことから神は天空の中心にいて、我々が何をやっているかを良く見ている。上から見られたのでは逃げられない。元々妙見信仰とはそのようなものである。四頁に四体の妙見像の絵を乗せてありますが、一番左は、銚子市堀内神社

にあります。之は皮鎧をつけています。妙見像としては最も古いものとされています。一二・三歳位の童子像である。髪の毛も長いのですが、カプロに結んでいます。作成も建武二年（一一三三）十一月廿日と記されています。之は後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒し建武の中興と言われた翌年の事です。二番目は皆さん良くご存じの香取郡東庄町立公民館に保存されている妙見立像です。之は武装していて木造彫眼造りで十三世紀後半の作であろうとなっています。三番目が香取郡多古町妙光寺にある妙見座像です。之も木造彩色彫眼造りで鎌倉後期の作と言われています。最後は山武市の個人の所有で妙見菩薩懸仏で銅鑄造、正安元年（一二九九）の作です。妙見は姿を童子に変身して天から降りてきて窮地に追い込まれた千葉氏を助けるという説話になっていて之で千葉氏の氏神十なり信仰の本尊となっています。

本会からのお知らせ

本年度も総会を終わって本格的に活動する時期で御座います。活動計画にも御座いますように、本年度は広く市民に働きかけるような講演会も計画されております。又特に本会のホームページを開設して広く市民にも働きかけていく予定です。大体九月の初めには稼働できるように担当者頑張つて準備を進めています。皆様からのご意見、ご提案を広く募集しております。ご協力をお願い致します。

なお、会員の参加者を募集しております。千葉氏を語る会に参加して見たいという方がおりましたら是非一緒に語って見ませんか多くの方にお声を掛けて下さい。之もお願い致します。

- ◇年会費 三千元
- ◇活動 講演会、勉強会等
- ◇連絡先 事務局長 日向 090 8305 6601

一口メモ

千葉氏の信仰伝説

上総国と下総国の東国境に栗山川が南北に流れ太平洋に注いでいます。この西側、現在の山武郡横芝光町屋形という処に四社神社がある。この社は千葉氏の祖と言われる高望王が京都から平氏の姓を賜り上総介を任命されて着いたところがこの地であり、ここに政務所、自身の館等を築き、崇拜する神を鬼門鎮護ため祭祀した所だと言われています。また隣の東金市関内には高望の雨乞祈願の地がある。この話は当地が大干魃で農民が苦しんでいたとき、高望が雨乞い祈願したところ、俄に雨雲が発生して大雨が降つたという。今はこの場所に水神様が祀られて高望の事績を伝えている。もう一つの伝説

高望の子である平良文は千葉氏の祖と言われているがその誕生についての説話として良文の母は日頃妙見菩薩を篤信しており、ある日自身の口の中に日輪が入る夢を見て不思議にも懐妊したという。その子の出産の時北斗七星が光を並べて庭樹に降り、中から妙見菩薩が現れて良文が生まれたという。このため良文は妙見菩薩の落胤と言われている。

まだまだ千葉氏伝説は沢山有りますが、又次の機会に譲るとして今回はここまでとします。



編集後記 編集子

大変遅くなりましたが会報第四号をお届けします。本年も会員一丸となって本会の設立趣意書に乗っ取り、各々の事業を確実、誠意を込めて推進し、会員の納得を得られるように会の運営を進めて参りたいと思えます。どうかご協力戴きますようお願い致します。